

私学の魂

聖和学院中学校・高等学校



**英語先進校の伝統と多彩な自己表現の場をバネに
1人ひとりの生徒を主役として見守り、自信を育て
6年間の大きな成長と卒業後の活躍を実現する
小規模ながらキラキラ輝く珠玉の女子進学校。**

風光明媚な逗子の地で、神奈川県では初めて現在も唯一の「英語科」設置校としての伝統と先進的な教育姿勢を受け継ぎ、「WISE (ワイズ)」＝「これからの世界を見据え (World)」、「自己を確立しながら (Identity)」、「理解力と分別を兼ね備えた (Sensible)」、「女性を育てる (Education)」を合言葉に、「国際社会で活躍する聡明な女性」の育成をめざし、一人ひとりの生徒の「将来、なりたい自分になる」という想いを応援し、「22歳の夢」の実現をサポートする聖和学院の教育について、第2代校長の佐々木富紀子先生と、ご自身も聖和学院中学校・高等学校のOGで、国語科教員として中1担任、広報ご担当を兼ねる栢本さゆり先生に、今回はお話を伺いました。



現在も第2代校長を務める佐々木富紀子先生と、教え子の栢本さゆり先生。

DATA

1

聖和学院中学校・高等学校

- 沿革 1942 (昭和 17) 年 逗子に聖和学院の前身である湘南女学塾を創立。
1949 (昭和 24) 年 学校名を聖和学院中学校・高等学校に改称。聖和学院幼稚園設立。
1968 (昭和 43) 年 聖和学院高等学校に英語科を設置。
1988 (昭和 63) 年 第1回ニュージーランド語学研修実施。
1992 (平成 4) 年 聖和学院創立 50周年記念式典を挙げる。
1998 (平成 10) 年 第1回イリノイ大学新潟校語学研修実施。
2001 (平成 13) 年 聖和学院高等学校英語科に理系コースを設置。
2002 (平成 14) 年 聖和学院創立 60周年記念行事を実施。
2005 (平成 17) 年 第1回英語強化合宿実施。
2009 (平成 21) 年 校舎全面リニューアル
2018 (平成 30) 年 ICT環境の整備。中学入試にプレゼン型入試、英語入試を新設
2019 (平成 31) 年 中学入試に「英語インタラクティブ入試」を新設。
2020 (令和 2) 年 中学入試に「英語プログラミング入試」を新設。

校長 佐々木 富紀子

所在地 〒249-0001 神奈川県逗子市久木 2-2-1

TEL : 046-871-2670

<https://www.seiwagakuin.ed.jp/>

交通 JR横須賀線「逗子駅」西口より徒歩8分。京浜急行逗子線「新逗子駅」北口より徒歩10分。

創立者・武藤功の理想を受け継ぐ 教員から教員への心のリレーが 先進的な女子教育環境を育ててきた！

今回お話を聞かせてくれた、国語科で中学1年生の担任と広報ご担当を兼ねる栢本（かやもと）さゆり先生は、ご自身も聖和学院中学校・高等学校の卒業生です。

小学生時代は大手の進学塾に通い、中学受験を経験した栢本先生が聖和学院を選んだのは、家族的な雰囲気が出ると保護者が思ったからだといいます。

「入学当時、私の担任をしてくださった内山先生は、温かくて、でも勉強や生活面ではとても厳しい先生でした。当時から英語教育に力を入れていた本校では毎朝英単語の小テストがあったのですが、5問中4問できて叱られ、でも5問できると褒めてもらえて…、それで何とか先生に褒められたいという思いでがんばって、やがて英語が好きになり、それが自信につながりました」と栢本先生は当時を振り返ります。

当時もいまも、「母校の聖和学院が大好きです！」と語る栢本先生。早稲田大学教育学部で国語科教員の免許を取得し、母校の聖和学院に教員として戻ってきてからは、大好きな生徒たちと授業や学校生活を過ごす忙しい日常のなかで、母校の魅力を一々多くの人に伝えたいという思いから、広報担当として、聖和学院の教育内容と生徒の成長や活躍のエピソードを各所で積極的に発信し続けています。



広報ご担当の栢本さゆり先生

そしていまは、栢本先生が在学中から慕っていた当時の担任の内山先生と机を並べ、ともに聖和学院の生徒の成長をサポートし、見守っています。また当時から校長を務めていた佐々木富紀子先生と事務長を務めていた武藤薫子先生（お二人とも英語科担当）も在任されており、長らく聖和学院の生徒の成長を見守ってきました。

つまり、聖和学院は現在でも、創立者・武藤功先生が抱いた創立の理念と教育の理想を、在職する先生から先生へ肌感覚で受け継いできた私立学校なのです。現在も第2代校長が在任中という学校は歴史ある私立中高一貫校のなかでも珍しい存在です。

緑豊かな台地から、風光明媚な逗子海岸を見下ろす湘南・逗子の地に、聖和学院の前身である「湘南女学塾」



創立者・武藤功先生は「世界英語教育者会議」で英・サッチャー女史と対談して影響を受けた！

が開塾されたのが1942（昭和17）年。以来、70余年にわたって、キリスト教精神に基づく真の心の教育を実践してきました。

「27歳のときに本校を設立した創立者・武藤功先生は、元総理大臣の小泉純一郎氏の祖父で、当時の通信大臣であった小泉次次郎氏には学校の立ち上げに協力していただきました」

その創立者・武藤功先生が、神奈川の高校では最初の「英語科」設置に踏み切ったのが1968（昭和43）年。自ら「世界英語教育者会議」に出席した際、当時は文部大臣で後に英国首相となるサッチャー女史と対談し「これからは女子にも英語が必要」という考えにも感銘を受けたといいます。いま、盛んにグローバル教育の必要性が叫ばれるはるか以前の約50年前から、聖和学院は独自の国際教育を実践し続けてきた先進校でもあるのです。

当時の様子を、生徒が『SEIWAGAKUIN TIMES』に執筆・編集・発行した記事は下記より閲覧できます。

【https://seiwagakuin.ed.jp/build/uploads/SEIWAGAKUIN_TIMES_20160711_final.pdf】

2006年には当時の松沢神奈川県知事が先進的な聖和学院中学校の英語教育を視察したいということで訪問されました。一人一台PCでCD-ROM教材を使って学習するなど、当時はまだ珍しかったPCを駆使した総合授業、高校における英語科設置など、英語教育に力を入れているということが新聞にも報道されました。

早くから現在の国際社会を見通し、英語教育に注力するとともに、常に時代の変化に即応した最善のカリキュラムや教育プログラムを導入するなど、先進的な女子教育に取り組んできた教育姿勢が、聖和学院の伝統であり、教員と学校関係者、生徒、卒業生に共有される誇りでもあります。

まず「英語を好きになる」プログラムで、生徒の学習意欲と発信力・表現力を育て、楽しく学べる最先端の英語教育を！

そうした聖和学院の英語教育は、生徒がまず「英語を好きになる」ことを大切にしています。

「そのひとつの例が、毎年の新入生（小学生）の入学前に3日間行う『英語事前準備の学習』です。中1全員と中2、中3が各5～6名が手伝いをする形で行われている、入学してからの英語学習に触れて楽しんでもらうのと同時に、入学式のときにはもう友達ができているという本校独自の入学前プログラムです。

また、中1と中2は4泊5日、高1（英語科は必修、普通科は希望者）は5泊6日で、湘南国際村で行う『イングリッシュ・キャンプ』も本校の特色です。かつて神奈川県では初めてのNZ語学研修（ホームステイ）を16年間実施してきました。ホームステイ後は南イリノイ大学新潟校で語学研修を10年間実施しました。

ホームステイを中止して南イリノイ大学新潟校の語学研修に切り替えたのは、9.11のアメリカ同時多発テロ以降の安全面を考慮しただけではなく、ホームステイだとホストファミリーに当たり外れがあり、また午後にはアクティビティとなるためでした。

さらに2008年からは一日英語漬けが可能な湘南国際村のイングリッシュキャンプに切り替えました。費用も約10万円程度に抑えられるようになって、保護者には喜ばれています」と栢本先生。

この湘南国際村の『イングリッシュ・キャンプ』では、今年も中1の生徒が、楽しんで英語でのゲームやアクティビティに取り組みました。

「夕食後に英語で日記をつけるプログラムがあり、1日目は単語を並べただけとか、「tired（疲れた…）」と



湘南国際村でのイングリッシュキャンプでは、入学間もない中1も英語を楽しく学べる！

一言だけ書いたりしている生徒もいましたが、2日目、3日目と過ごしていくうちに、もっと伝えたいが出てきて、文法には間違いがあっても、記入欄の枠をみ出すほど、たくさん英語で書いてくる生徒が増えました。『伝えたい』という気持ちが英語と結びついているという点では、大きな意味を持つ経験になっていると思います。

初日は外に出て、階段の上と下で二つのチームに分かれて、アルファベットや動物の名前、いま見えている景色の色を英語で言い合い、間違えてしまうと階段を降りたり登ったりして仲間と距離が離れてしまうゲームをしましたが、必死になって英語で叫んで回答する友達を、階段の上から仲間が大声で応援したり…。

次の日にはその成果が発揮されて、iPadを使ってプレゼンテーションで、親善大使になったつもりで、その国の良いところを発表するという課題だったのですが、本当に全員が大きな声で話すことができました。引っ込み思案な生徒も友達にアドバイスしてもらったり、『昨日あんなに大きな声で叫んでいたのだから大丈夫！』と励まされたりして、大きな声で英語を話せていました」と栢本先生は笑顔で教えてくれました。

系列幼稚園で実践してきた『KOOV』を使ったネイティブによる英語プログラミング授業を導入

ところで聖和学院では、中高とキャンパスを同じくする聖和学院幼稚園と、JR辻堂駅近くにある聖和学院第二幼稚園で、「KOOV（クープ）」と呼ばれる、先進的なプログラミング教育のツールを、STEAM教育の一環として2017年から導入しています。そのノウハウを生かして、中学校の授業でも「KOOV（クープ）」を使った授業を導入開始し、英語学習に生かしています。

「中1でネイティブの先生の英語の授業のなかで『KOOV』を使った授業をしているのですが、生徒は本当に楽しそうに取り組んでいます。これはもともと聖和生が持っている素質である、何でも楽しんで取り組むとか、前向きに物事をとらえるとか、一つひとつできることを大事にして仲間と協力できるとか、そういう力を図る、育てるのにちょうど良い材料なんだということを改めて感じています。

iPadのアプリの言語も英語表示に設定して、授業中の会話も英語で、というルールで、英語とプログラミングを楽しく学んでいます。友達同士で会話をするときにも、ネイティブの先生と話すときにも英語を使います。若いからできるのだと思うのですが、生徒はそれを自然にやっつけてくれます。楽しめる環境で、やる



「22歳の夢」を実現するための中高6年間の教育実践のチャート。

具体的な教育実践としても、国語表現やプレゼンも、プログラミングなどの授業があり、それを入試に反映させたものだとことをお伝えしたいと思います。

文科省も、『思考力・判断力・表現力』と、論理的思考力を育てたいと言っていますが、本校でも2020年

度以降の新たな大学入試への対応として、定期テスト以外の実力テストを、今後の大学入試で出題されるという実用的な文章、たとえば道案内をすとか、広告ポスターをつくるとか、そうした素材文で試したところ、本校の生徒はむしろ、そうした問題の方が点数も良かったので、その点も自信になっています」と栢本先生。

ここで、聖和学院が、今後の社会で求められ、今後の大学入試でも問われる「思考力・判断力・表現力」を育てるプログラムを、いち早く自らの教育に導入している点に注目すべきでしょう。しかも、そこで示されている「思考力・判断力・表現力」は、聖和学院が創立から現在まで大切に続けてきた「読解力・思考力・表現力」とも意味的にほとんど一致します。

こうした先進性を持つ聖和学院の教育と、来春新設される「英語プログラミング入試」に関心を持つ小学生と保護者が増えることが楽しみになってきました。

「そうした背景があって、来春2020年の中学入試では、新たに『英語プログラミング入試』を導入することになりました。これまでに実施してきた『体験講座』も好評で、事前の予想より多くの小学生が参加してくれました。どんな力を持った受験生がチャレンジしてくれるか楽しみです」と栢本先生はいいます。

「聖和学院では『読解力・思考力・表現力を育てたい』ということを以前から伝えてきました。入学してからも

度以降の新たな大学入試への対応として、定期テスト以外の実力テストを、今後の大学入試で出題されるという実用的な文章、たとえば道案内をすとか、広告ポスターをつくるとか、そうした素材文で試したところ、本校の生徒はむしろ、そうした問題の方が点数も良かったので、その点も自信になっています」と栢本先生。

「そうした背景があって、来春2020年の中学入試では、新たに『英語プログラミング入試』を導入することになりました。これまでに実施してきた『体験講座』も好評で、事前の予想より多くの小学生が参加してくれました。どんな力を持った受験生がチャレンジしてくれるか楽しみです」と栢本先生はいいます。

「そうした背景があって、来春2020年の中学入試では、新たに『英語プログラミング入試』を導入することになりました。これまでに実施してきた『体験講座』も好評で、事前の予想より多くの小学生が参加してくれました。どんな力を持った受験生がチャレンジしてくれるか楽しみです」と栢本先生はいいます。

生徒が6年間で大きく成長する秘訣は、「一人ひとりを主役に」見守る姿勢と褒められて高まる「自己肯定感の高さ」

聖和学院中学校・高等学校の在校生には、いつも訪れる度に屈託のない表情で挨拶をしてくれて、明るく学校生活を楽しむ様子から、この年代の子どもたちにとって大切な「自己肯定感」の高さを感じます。同時に、お話を聞かせてくれた栢本先生はもちろん、様々な世界で活躍をする卒業生にも、母校愛と、そこで身に着けた様々な力や素養、感性への自信が感じられます。

聖和学院の学校 Web サイトの「22歳の夢～卒業生からのメッセージ」のコーナーには、それぞれ大学卒業後に社会に出て、様々な世界で活躍している若きOGからのメッセージが紹介されています。

それらのメッセージからは、高い英語の力はもちろん、それ以外にも、聖和学院で過ごし、身に着けた感性や教養、礼儀作法や日常の勤勉な生活習慣などが自信になって、その後、大学での学問・研究や、社会に出てからの活躍の下地になっていることが伝わります。

聖和学院は感性豊かな、 そして表現力豊かな女性を育成いたします		
読解力・思考力・表現力	具体的な実践	入試方式
	英語スピーチコンテスト	表現力・総合力型
	模擬国連	プレゼンテーション
	ピリオパバトル	英語インタラクティブ
	プレゼンコンテスト	英語プログラミング NEW
プログラミング 全員がコンクール参加 「表現」「文法」の授業	論理的思考力	

「読解力・思考力・表現力」の育成を重視する聖和学院では、多様な教育展開を新タイプ入試に反映している！

正直なところ、「なんで聖和学院の在校生も卒業生もこんなに母校が好きで、自己肯定感が高いのだろう？」ということが率直な疑問でもありました。

ただ、先生方からお話を聞いてみると、聖和学院は中高ともアットホームで家族的な学校であるだけに、生徒1人ひとりを、先生方全員で「いつも見守っている」伝統がしっかりと受け継がれていることがわかりました。

いつも自分をきちんと見ていてくれる大人がいれば、多少の紆余曲折があったとしても、子どもは必ず真っ直ぐに育つといます。きっと聖和学院は、そんな当たり前だけれども決して簡単ではないことを、教育姿勢として堅固に持ち続けてきた学校なのでしょう。

かつて子どもの数が多かった時代に、現在の少子化時代を見通して、いち早く学校規模のリサイズを図ってきた聖和学院は、“アットホームな学校だからこそ”できる親身で温かな教育を実践できる環境にあるようです。

もうひとつ、生徒や卒業生の自己肯定感の高さの秘訣はどこにあるのでしょうか。

「私自身は、恩師であり教員の先輩でもある内山先生から、生徒の一日の学校生活が『褒める、褒める、叱る、褒める、褒める』で終わるようにするように教えられました。そして笑顔で帰れるようにと…。ただ褒めてばかりでは、大切なことを伝えられません。かといって叱られたままで帰宅したら翌日の学校が楽しくなくなってしまいます。何より毎日、楽しく学校に通ってくれることが一番ですから…。ですので、叱らないといけないことがあるほど、その分たくさん褒めないといけません(笑)」と、栢本先生は「褒める」ことの大切さと、時々「叱る」ことの意味を伝えてくれました。

「たとえば、新しく入学してきた中学1年生には、みんなのことが大好きだよと伝える一方で、先生に対しては、いわゆる“タメ口”で話してはいけませんよということを伝えていきます(笑)」と栢本先生。

今回のインタビュー取材の途中から校務の合間に同席してくれた校長の佐々木富紀子先生もこういいます。

「入学してきた時にはまだ幼い生徒や、性格的に大人しかった生徒でも、“いつの間にこんなに変わったのかしら?”と思うほど成長して、一人ひとりが何かに自信を持って卒業していってくれます。その姿が頼もしく、ほとんどの卒業生が何かあると学校に戻ってきてくれることが、とても嬉しいですね。こうした少子化の時代に、女子校である本校を選んで入学してきてくれる生徒とご家庭があることに感謝しています」

第2代校長として、創立者・武藤功の意思を継ぎ、聖和学院の教育の理想を守り育ててきた佐々木先生は、ご自身が創立者からも言われてきた言葉を借りて、新任の先生にはこう伝えているといます。

「生徒さんはご家庭と保護者にとっての宝物。自分の子どものように見守り、育ててください」と…。

しかし、聖和学院の教育は、決して生徒を大事にするだけではありません。あらゆる機会に、生徒の好奇心や挑戦心を刺激し、成長を促すようなチャンスがあれば、積極的に在校生のチャレンジを勧め、親身にサポートしつつ背中を押してあげることで、“強さと逞しさ”も育ててくれているように感じます。

それが、授業や行事を通じて行われる様々な発表やプレゼンテーションの機会をはじめ、校外で開催される各種のコンテストや発表会で聖和学院の在校生があげてきた目覚ましい成果や、そこに挑戦していく過程での成長ぶりに表れています。

「そういうコンテストにも、できるだけ全員でチャレンジして、みんなで楽しめるようにしています。なかには個々の生徒の希望で出場するものもありますが、基本は『みんなでやろうよ!』という考え方です」

こうして「聖和学院の生徒はやれば必ずできる。いまはまだできなくても、やがて必ずできるようになる!」と、生徒1人ひとりの力と可能性を信じている先生方が、こうして、日々様子を見守り、6年間で大きく成長していく過程を、保護者とともに楽しんで見守っているのが、聖和学院という女子校なのです。



国際社会で活躍する聡明な女性をめざす聖和学院の3つの目標、「GLOBAL (国際理解教育)」、「CHRISTIANITY (心の教育)」、「LIBERAL ARTS (教養教育)」。

アットホームな学年縦割り教育と、自己表現を受け止めてもらう経験が個々の生徒の自信と強さを育てる!

もうひとつ、聖和学院の教育で特徴的なのが、小規模な学校であることを生かして、「複数学年で一緒に取り組む」課外活動やプレゼンテーション、発表などの機会が数多く設けられていることです。いま教育の世界で注目されているオランダのイェナプラン教育の「無学年(複数学年が一緒に)授業」にも共通するような



毎日の礼拝では心を育てると同時に、牧師の先生のお話を「よく聞く」ことで「読解力・思考力・表現力」を育てる。

学びのスタイルが、すでに随所で実践されています。

「学年を混ぜての行事や課外学習は、聖和学院が小規模な学校だからできることなのだと思いますが、先ほどのイングリッシュキャンプも中1と中2の2学年で行っています。また、遠足は3学年合同で行っています。実力テストも、国語では3学年同じものを課していて、3学年通して順位を出しています。新たな大学入試に対応する補習も3学年合同で、学年が混ざるようにグループをつくっています。

ふだんの生活のなかでも、中1が中3の先輩に何か聞きに行くとか、中1と中2で協力するとか、同い年の友達とだけではわからないことを、違う学年の人たちと一緒に考えていく機会があります。また、今年で3年目を迎えたプレゼンテーション・コンテストも中1から高2までが一緒に行っています」と栢本先生。

中学生全員で行く5月の遠足でも、ただ楽しむだけではなく、何らかのテーマを決めて、学校に帰ってから新聞をつくり、その内容をアナウンサーになったつもりでプレゼンテーションをするという形をとりました。

「ちょうど今年は引率担当の教員が国語と体育と理科でしたので、それぞれ教科とも関連するテーマを決めて、中1から中3の生徒はいずれかのグループに入り、探究活動と校内での新聞づくり、プレゼンテーションに結び付けました。『アナウンサーになったつもりで』というと難しく感じるかもしれませんが、生徒はむしろ積極的に、「みんなでやろう!」という雰囲気の中かで、全員がアナウンサーのように話せていました」と栢本先生は教えてくれました。

「入学間もない中学1年生には、なるべくどこかの学年と中1を組み合わせるようにしています。5月の遠足も3学年合同で、中1が独りぼっちにならないよう上級生が見守るようにしています。他にも、クリスマスには、中学生が全員でハレルヤコーラスの『メサイア』を歌うのですが、その練習を毎週火曜日にしていて、そこでは中1がソプラノ、中2がアルト、中3がメゾと

いうパートを受け持って一緒に歌います」と栢本先生。

聖和学院では、こういった縦割りの活動が、年間のさまざまな場面で自然に行われている場で、「みんなでがんばろう!」という雰囲気が生まれ、そこで各自が発言、発表やプレゼンテーションした内容を、同じクラス・学年の友達や、先輩たちが温かく受け止めて評価や拍手をしてくれることが当たり前に行われています。

そこで「自己表現」することと、周囲からの「共感」や「承認」、そして「賞賛」が結びつき、学ぶ楽しさを感じるとともに、各自が自信を持てるようになり、自己肯定感も高めていけるのでしょう。

そうした場が数多く設けられていることが、きっと生徒の大きな成長を後押ししているに違いありません。

「生徒は自分たちの生活とも結びついたテーマを考えて、それを“発信”することは、慣れてくると楽しくなって、もっとやりたくなってきます(笑)」と栢本先生は笑顔で教えてくれました。

聖和学院が大切にしてきた、『読解力・思考力・表現力』は今後の大学入試でも問われる力!

聖和学院では、何より「感性豊かな、表現力豊かな女性の育成」をめざす「心の教育」を大切にしています。そのために、『読解力・思考力・表現力』を豊かにする様々な教育プログラムと体験の場を設けています。先にも触れたように、文部科学省が今後の日本の大学入試で問う力として掲げたのが『思考力・判断力・表現力』ですが、校長の佐々木先生はこういいます。

「聖和学院では、その方針が示される以前から『判断力』に代わる『読解力』を最初に掲げて教育目標にしています。それは、別の言葉に置き換えると、『本をよく読む。人の話をよく聞く。噛み砕いて思考する。考えたことを表現する』という一連の流れを、授業をはじめとした学校生活の様々な場面で体験し、習慣として身に着け、力を育てていけるようにしています」

「心の教育としても、たとえばイースター礼拝や母の日礼拝の機会に、牧師の先生のお話を聞き、それを噛み砕いて思考し、自分はどう思ったかを表現することをしています。生徒が『信じる』というテーマで書いたものを一つ紹介すると、『人を信じることは簡単なことではありません。信じることは認めるということ。心から信じることができれば、どんなに大切なことでも任せられます。では信じるためにはどうすればいいのか。私は心を開くということが大事だと思います。まず心を開き、相手のことを知る、それが第一歩なのです』と書いてくれていますが、このなかにも書かれているこ



日々の学校生活の様々な場面で、クラス・学年の仲間や先輩・後輩と触れ合い、互いに認め合い、協働する心を養う。

とには『読解力・思考力・表現力』のすべての要素が含まれていますよね」と栢本先生は話してくれました。

そして、そうした教育理念、教育方針に基づき、『偏差値や教科の筆記試験では分からない、目に見えない力を見せてほしい』という考えから、この2～3年の間に中学入試に新たに導入したのが、「表現力・総合力型入試」、「プレゼンテーション型入試」、「英語インタラクティブ入試」、「英語プログラミング入試（※2020年から新設）」という、新たなタイプの特色入試です。

「本校の入試に関心を持ってくれた保護者には、こうした新しい入試方式と、入学してからの教科教育や体験プログラムとのつながりを知っていただきたいと思っています。幼稚園に続いて中学校でも始めた『KOOV』による英語と組み合わせたプログラミングの授業には、すでに生徒が喜んで取り組んでいます。

英語教育の内容にはもともと自信を持っていましたが、今後の大学入試で求められる「CEFR」基準の英語4技能の力も、『B1～B2』の力を育てることをめざしてしっかり行っています。

たとえば現在は中3から東京理科大学のオンライン学習中心のテキストによる大学先生の授業が受けられるようになってきました。20年前から東京理科大で教鞭をとられている英語の古山先生は私の中学時代からCALL授業を教えていましたが、現在でもその古山先生は聖和学院でオンラインによる英語教育をしてくださっています。私も当時中学で古山先生の授業を受けていたので、現在もその流れで先輩たちが大学教員によるオンラインによる英語学習を受けているのは大きな喜びでもあります。そのなかでは、その大学の先生から『聖和学院の生徒は良いですね!』と言われていきます。大学生はなかなか手が上がらないのだそうですが、本校の生徒は反応が良く、もちろん大学の英語授業がすべて理解できるわけではないのですが、『ここまでは分かるのですが、ここから分かりません』とか『こ

のことをもっと調べたいのですが…』という発言があるのだそうです。英語のコミュニケーションで大切なことは、『分からないことと相手に伝える』ことなのだそうで、本校の生徒はそういう『英語を学ぶ姿勢』があるという評価をいただいています」と栢本先生。

英語力の高い生徒には、「英検2級プラスα」の力をつけるための、放課後の「英語級別対策講座」も行われています。

数々体験するプレゼンテーションで、 高めてきた自己肯定感と豊かな表現力が 大学入試や就職活動でも力を発揮する！

「本校では英語に加えて『国語表現』の授業も非常に大切にされていて、本校の教育ビジョン『22歳の夢』の実現をサポートするキャリア教育の一環で、JALのCAの方を招いて、美しい日本語や、立ち居振る舞いを教わる機会もあります。ですので、大学受験や就活の際にも、敬語や自己アピールには、あまり困らないようです。

とくに国語科では、先ほどからお伝えしている『読解力・思考力・表現力』を育てていくために、文法と表現の授業を中1から分けて行っています。

たとえば中1では、30秒から1分くらいのプレゼンテーションを行います。中2では、その幅を広げて、とくに今年の中2はプレゼン好きな生徒が多いので、パネルディスカッションをするときにも『パネラーをやりたい人?』と聞くとみんな手が上がり、私がファシリテータをすると、それも自分たちでやりたいという意見が出てきます。

最近も、先に話題になったグレタさんの講演文を読み、賛成と反対に分かれて議論をしました。生徒は話し合ううちに賛成から反対に考えが変わるなど反応は様々でしたが、様々な角度や視点から取り組んでくれました。また、中3の授業では『自分の住んでいる地域の課題を見つけて、その解決策を提案する』というテーマに取り組んでもらいました。これまでは授業のなかで『課題を見つける』ということはしてきましたが、これからは『解決策まで考える』ことをしていきたいと思っています。生徒は横浜市や鎌倉市の課題を見つけて、ユニークな提案をしてくれました。

こういう形の授業を、本校の生徒は『もっとやりたい』と言ってくれます」と栢本先生はいいます。

そして、高校2年生がいちばんのヤマ場で、先ほども触れた20分間のプレゼンテーションにつながっていきます。

「高2の国語表現の授業では、『環境問題』とか『異

文化理解』など12のテーマから選んで、グループを組んで考えていきます。高2の生徒はかなり忙しいし他の授業もがんばってほしいので、今年は『レジュメだけで、パワーポイントは作成しなくてもいいよ』という形にしようとする、逆に生徒の方から『他の教科の勉強もきちんとするから、パワーポイントもつくらせてほしい』と言ってきて、本当に涙が出るくらい感動的なパワーポイントをつくって見せてくれました。

3～4人のグループごとに20分間プレゼンをするのですが、ひとつのグループは異文化理解というテーマで『オリンピック』に焦点を当てて、日本がホスト国になるとどんな問題が起こるのかとか、考えられる文化摩擦をどうすれば解消できるかなどを考えて発表するものです。

だいたいどのグループの発表も10分くらいすると、聞く人たちの興味を引くために小ネタを混ぜたり工夫してくれるのですが、あるチームは、それを『ニュース番組』の形でプレゼンしてくれました。途中10分くらいのところで『いったんCMです』と入れて、そのCMまで作ってきていました。そのCMも、クラスの仲間に『オリンピックのときには何をしたいですか?』というコメントをとって、最後は『がんばれニッポン!』みたいにエールを贈るCMでした。

これはとても良くできたプレゼンでしたので、この後も全校生徒の前で発表してもらおう予定です。

後期にも、またプレゼンテーション・コンテストがありますので、先輩たちの例を手本に、またいろいろと工夫してくれると思います。

ほかにも、『食文化』のテーマに取り組んだグループでは、自分たちでお弁当をつくって写真に撮り、『5大栄養素のなかでは何が足りていて何か不足しがちか?』という視点で、『野菜が1日350g必要』ということを伝えるために、写真を見せるのかと思ったら、トッパーにつめた野菜の実物を教室内で回してみせるなど、リアルな演出の工夫を見せてくれました。

また、『ビブリオバトル』にも力を入れていて、『読解力・思考力・表現力』をバランスよく育むのに適した機会だと思います。これも、ときどき少し趣向を変えて、読む対象を古典に絞ったり、自分が得意なことだけではなく、自分自身が今まで挑戦したかったジャンルにも、関心の幅を広げてみようという傾向が出てきました。推薦入試を受ける高2や高3の生徒には、「SDGs」のテーマを探究する生徒も増えてきました」と、栢本先生は中高6年間で行われるプレゼンテーションの一連の流れを説明してくれました。

こうした「自己表現」の機会を広げることによって、伝統の女子教育をさらに進化させてきた聖和学院。



現在、高校2年生の乗野明日香さんは競技ヨットで国際的な活躍を見せている。11月4日に行われた「北海道・東北420級選手権大会」でも優勝した!

「創立から変わることのない伝統を受け継ぎながらも、時代の変化に応じて新しい教育も取り入れていく必要があります。本校でも『KOOV』を導入したことも合わせて、来年からは、生徒全員にiPadを持たせる形を予定しています」と校長の佐々木先生。

「今年は、理科、プログラミング、算数、国語の授業体験会への参加もこれまでの最多で、なかでも理科では香水をつくろうという女子受けしそうなテーマで行ったところ大人気でした。プログラミングは女子にはどうかと思っていましたが、これも人気で締め切りになるほどでした。国語では『敬語マスターになろう』というプレゼン体験も、保護者の前でプレゼンするなどの経験をしてもらいました。11月には入試対策説明会がありますので、そこでは『目に見えない、偏差値ではわからない』力や『聖和学院でがんばりたい』という気持ちを見せてほしいということをしかりと伝えていきたいと考えています」と栢本先生。

来春2020年入試で、聖和学院の入試に多くの小学生と保護者が期待と希望を感じて、多様な入試にチャレンジしてくれることが楽しみになってきました。

2020年度入試情報

下記の8パターンより、入試形態をご選択いただけます。

- ① 2科型【国語・算数】
- ② 4科型【国語・算数・社会・理科】
- ③ 英語型【英語(英会話または筆記)・作文】
- ④ 得意科目2科選択型
【国語・算数・英語・社会・理科より2科選択】
- ⑤ 表現力・総合型
- ⑥ プレゼンテーション型【作文・自己PR】
- ⑦ 英語インタラクティブ入試+作文型
- ⑧ 英語プログラミング入試

最新の情報・出題形式・傾向などについては、学校説明会でご案内いたします。ぜひご来校ください。